

第六章 日本軍の「精神第一主義」

「転進」と「玉砕」

昭和十七（一九四二）年八月に、アメリカ軍が一万九千人の兵力をもって、ガダルカナル島と、隣接するツラギ島に上陸した。

陸軍は開戦後、ガダルカナル島でアメリカ軍にはじめて敗れた。

ツラギ島守備隊は、その日のうちに全滅した。

ガダルカナル島には、飛行場を建設していた二千二百人の海軍設営隊がいたが、大半が労務員だった。

大本営は来攻したアメリカ軍の兵力を見くびって、急いで四千三百人の陸軍部隊と、五百人の海軍陸戦隊を送り込んで、アメリカ軍を攻撃したが、失敗に終わった。アメリカ軍の圧倒的な火力の前に、銃剣をかざして突撃する伝統戦法は、歯がたたなかった。

攻撃に参加した九百十六人のうち、七百七十七人が戦死し、百二十六人だけが出発地点まで戻れた。アメリカ軍の戦死者は、四十人だった。

大本営は十月に本腰を入れて、第二師団を送り込んだ。第二師団は未踏のジャングルを踏破して、自兵突撃による総攻撃を行ったが、また、惨憺たる失敗に終わった。

さらに、第三十八師団をガダルカナル島へ送ったものの、途中で十一隻の輸送船のうち、

七隻が撃沈されて、火炮をすべて失い、二千人だけしか、上陸できなかった。

アメリカによって、ガダルカナル島周辺の制空権と、制海権を奪われていたために、食糧をほとんど送ることができず、多くの将兵が餓死した。

大本営はガダルカナル島を放棄することに決定して、翌年一月から二月にかけて、撤退した。この時、大本営発表に当たって、はじめて「転進」という言葉が使われた。

八月以来、総兵力にして三万一千四百四人が上陸したのだが、そのうち撤退できた者は、一万六百五十二人しかなかった。二万人あまりが戦死、あるいは飢死した。

そのあいだに、広大なニューギニア島で、米濠軍に対する死闘が続いた。ニューギニア島では、前年十二月にバサプアで日本軍が全滅し、八百人が戦死した。一月に、ブナにおいて日本軍がやはり全滅し、ギルワから激戦の後に撤退した。ブナとギルワで、合わせて七千六百人が戦死した。

翌年の五月十二日に、一万二千人の兵力をもつアメリカ軍が、アリュウシャン列島のアツツ島に、空母、戦艦、巡洋艦などによって援護されて、上陸した。

アツツ島には、約二千五百人の部隊があったが、二十九日に残存兵力をあげて、最後の突撃を行った。

翌日、大本営が「アッツ島守備部隊は五月十二日以来、極めて困難なる状況下に、寡兵よく優勢なる敵に対し血戦継続中の処。五月二十九日夜、敵主力部隊に対し最後の鉄槌を下し、皇軍の真髓を發揮せんと決意し、全力を挙げて壮烈なる攻撃を敢行せり。爾後通信全く杜絶、全員玉碎せるものと認む。

傷病者にして攻撃に参加し得ざるものは、之に先ち悉く自決せり」と、発表した。大本営はこの時、はじめて「玉碎」という言葉を用いた。

朝日新聞は、アッツ島玉碎を報じて、「玉碎は生命をすて、道義に生き、命より名を惜しむ日本人の死生観を、端的に表現した言葉。

軍神部隊がアッツで遂げた壮烈極まりなき玉碎こそ、萬代不滅の偉勲である」と、賞讃した。

そして、「玉碎の語は支那の六朝末の北斎の元景安伝に、『大丈夫寧可玉碎不瓦全』とあり、瓦の如く光も放たず、何事もなすことなく生命を全うするよりも、玉の如く美しく光を放ち、人に尊重され、勲を立て潔く名譽の死を遂ぐる事が玉碎の意味である」と解説し、「わが国古来忠臣烈士の言行に見ることが多い」と述べて、西郷隆盛の詩と、吉田松陰の『留魂録』を、引用した。

アッツ島の玉碎以後、陸海軍は戦うごとに、敗れた。

アッツ島においても、それからつきつきと玉碎していった、どの島においても、守備隊は最後まで、孤立無援で戦わねばならなかった。制空権も、制海権も取られていたために、外から握り飯一個すら、届けることができなかった。

いったい、日本軍の指揮官は、アメリカ軍の圧倒的な火力を、どのようにみたのだろうか。

十一月に、ニューギニア島東方のブーゲンビル島のタロキナ岬に、二万人のアメリカ軍が上陸して、二百人あまりの日本軍監視隊を蹴散らした。

アメリカ軍を撃退するために、一個連隊千二百人が急派された。ブーゲンビル島は面積にして、北海道の四分の一あまりある。

連隊は上陸すると、未踏のジャングルを五十キロも分け入った（途中、渡河中に兵二人が、鰐に食われた）うえで、果敢な夜襲を執行し、得意の銃剣突撃を行った。

防衛庁防衛研究所（当時）戦史室の『戦史叢書』によれば、連隊長の浜之上俊秋大佐がその時の状況を、次のように描いている。

「敵の抵抗が頑強で、戦闘は激しくなるばかりで、一步も前進が出来ない。従来支那で

の戦闘では、当初の抵抗は固くても、強引にやれば抜けたものであるが、この状況は支那軍相手の戦闘とは、全く様子が違ふと感した。

敵の迫撃砲は集中射撃の連打で、日本軍の戦線を区分して、適当な幅と深さに地図上に番号を付け、その番号の地域に至短時間に数百発の砲弾を撃ち込んで、ネズミ一匹も生存しえない猛射を繰り返す。

その勢いや壮烈、その規模や雄大で、進もうとしても力足らず、その場に居坐らんか、損害は激増して、全滅に陥ることは必然と言わなければならぬ。

致し方なく、一片の恥を忍んで、敵迫撃砲の有効射程の外に部隊を移動し、態勢を建て直して弾薬を補充し、再攻撃を準備する以外になかった」

「移動」は、退却のことである。浜之上大佐は撤退を決意して、連隊は戦場を離脱した。日本軍は、退却という言葉を嫌って、使わなかった。現実には目を塞いで、驗——縁起を担いだからである。「移動」、あるいは「転進」といった。

三八式歩兵銃にみる火力の差

アメリカ軍が七月二十三日に、テナアン島に上陸した。

四千人の日本守備隊は二十五日に、陸海軍部隊をあげて、アメリカ軍に対する白兵攻撃を行ったが、千二百四十一人の戦死者をだして、失敗に終わった。

テナアン島にあった第一航空艦隊の角田覚治司令長官が、七月二十七日に海軍軍令部に宛てて打電し、日米の戦力の差について、報告している。

「嚴重ナル警戒陣地ニ鉄条網、聴音機ヲ有ス 我ガ方ノ近接ヲ聴知スルヤ戦車、迫撃砲、自動火器ヲ以テ猛烈ニ射撃、更ニ近接スルヤ火焰放射器ヲ極度ニ使用、而シテ此ノ間周囲ノ艦砲、陸砲ヲ以テ終夜間断ナク照明弾ヲ打揚ゲ。

更ニ各種弾丸ヲオシミ無ク使用シ威嚇射撃ヲ実施（上陸開始前日ヨリ『テナヤン』全島ニ対スル此ノ種発射弾概数毎夜三、〇〇〇発ヲ下ラザルベシ、ラソー司令部所在ノミニ対シテモ六〇〇発乃至一、〇〇〇発発射）我ガ方ノ夜間行動ヲ拘束スルコト極メテ大ナリ。二十五日我ガ陸軍夜襲失敗後 聯隊長血涙ヲ流シテ曰ク『我ガ兵ハ勇敢ナリ然レドモ敵ノ装備ハ夫以上ナリキ』ト」

テナアン島の守備隊は、八月三日に玉碎した。

アメリカ軍が弾薬をふんだんに使うのに対して、日本軍は火力の差を、精神力で補った。物量に対する、精神の戦いだった。

日本軍の三八歩兵銃に対して、アメリカ軍は自動小銃だった。三八歩兵銃は日露戦争の明治三十八（一九〇五）年に、制式化されていた。

三八式歩兵銃は一発ずつ五発まで、発射できた。第一次世界大戦中に、ドイツが租借していた青島攻略戦に当たって、はじめて使用された。

もちろん、三八式歩兵銃だけで戦ったのではなかった。

歩兵部隊には、軽機関銃、重機関銃、擲弾筒、歩兵砲、連射砲などがあつたが、アメリカ軍と比較したら、数も、弾薬の量も少なかった。アメリカ軍が火力によって面を覆うのに対して、日本軍は点を狙った。面と点の戦いだった。

後に、アメリカ軍がフィリピンのルソン島に上陸した時に、上空から日本兵に対して、大量の宣伝ビラが撒かれた。三八式歩兵銃の写真がある。

「諸君の使つて居られる三八式歩兵銃は明治三十八年の日露戦争当時新鋭兵器として村田銃に代つて初めて戦線に登場したのは御承知の通りであります。

然しこれは四十年前のことであります。その後各國は競つて科學の研究に没頭し科學兵器に一大進歩を見た事は世界各人の知る處であります。

然るに諸君が自動小銃に対し槓杆式の小銃で闘はねばならないのは何故でせうか。若し

諸君の敢闘精神に米軍と同様な新鋭兵器を以つて闘つたらレイテ島の様な悲惨を見ずに入だかも知れません。

いくら精神力でも三八式歩兵銃ではどうしてコンソリの五〇〇キロ爆撃に喰つてか、ることが出来ませうか」

「コンソリ」は、コンソリデラッド爆撃機のことである。

日本軍では、銃剣突撃が何よりも重視されたから、三八式歩兵銃がもつとも中心的な兵器だった。

平成二十一（二〇〇九）年に、TBSの『みのもんたの朝ズバッ！』や、フジテレビの『どーもキナナル！』によつて、埼玉県春日部市の介護老人保健施設『しょうわ』が、旧軍の銃を治療に用いていることが、取り上げられた。

老人介護施設『しょうわ』で、三八式歩兵銃のモデルガンをも、認知症の高齢者男性に見せたところ、それまで立ち上がれなかったのに、やにわに立って、モデルガンを肩に担つて、歩き始めた。

テレビ番組によれば、その後も施設では、三八式歩兵銃のモデルガンを、認知症の治療に、役立てているということだった。

日本軍の精華とされた白兵戦法と弾量の差

日本軍はどの戦場においても、日露戦争以来まったく変わらない、白兵戦法をとった。

敗戦の昭和二十(一九四五)年四月に、大本営陸軍部が本土決戦に備えて、『国民抗戦必携』というパンフレットを配布したが、「銃、剣はもちろん刀、槍、竹槍から鎌、ナタ、玄能、出刃包丁、鳶口に至るまで、これを白兵戦闘兵器として用いる」と、書かれていた。軍はアメリカ軍が上陸したら、一般国民まで白兵戦闘を行うことを、期待していた。玄能は石を割ったりするのに用いる鉄槌で、鳶口は棒の端に鉄製の鉤をつけて、物を壊したりするのに、使われる。

日本が敗れる日まで、日本軍では歩兵が主兵だった。白兵攻撃が、戦闘の帰趨を決めるものとされた。また、何よりも、敢闘精神が重視されて、「精神第一主義」をとった。

アメリカ軍は上陸する前に、艦載機と、戦艦、巡洋艦、駆逐艦から、徹底的な砲爆撃を加えた。ほとんどの島で、全域が射程内に入ったから、日本将兵は休みなく、海上からの激しい砲撃にさらされた。

アメリカの戦艦一隻の弾量は、日本軍の五個師団分に当たった。日本軍には、想像することができない弾量だった。夜は間断なく照明弾が撃ちあげられて、真昼間のように明るくなったから、壕から移動することも難しかった。

昭和十九(一九四四)年六月十三日から、アメリカ機動部隊の戦艦七隻、巡洋艦十一隻、駆逐艦二十六隻が、サイパン島、テニアン島に対して三日にわたる砲撃を行ったうえで、十五日にアメリカ海兵隊の第一波がサイパン島に上陸した。

陸海軍部隊によって構成された守備隊は、頑強に抵抗したが、七月五日に海軍中部太平洋方面艦隊司令長官の南雲忠一中将と、陸軍北マリアナ集団司令官の斎藤義次中将が連名で、最後の総攻撃の命令を下した。

「一、米鬼ノ侵攻ハ依然熾烈ナルモ諸隊本日ノ敢闘努力ハ克ク真面目ヲ發揮セリ。二、『サイパン』守備隊ハ先ニ訓示セル所ニ随ヒ明後七日米鬼ヲ索メテ攻勢ニ前進シ一人克ク十人ヲ斃シ全員玉碎セントス」から始まっている。

六日、最後の突撃を行うのに当たって、南雲中将の名で将兵に訓示を与え、大本営にそのむねを打電した。

「全在島ノ皇軍陸海空ノ將兵及軍属ハ克ク協力一致善戦敢闘随所ニ皇軍ノ面白ク發揮シ

(中略)

生死オモから須クソノ時ヲ得テ帝国男児ノ真骨頂しんこつちようアリ。(中略)

今米軍二一撃ヲ加ヘ太平洋ノ防波堤トシテサイパン島ニ骨ヲ埋メントス。
続ケ」

南雲中将は大本営に、「守備隊ハ善戦コレ努メ克ク奮闘努力セルモ遂ニ利アラズ最高指揮官ヲ先頭ニ全員敵ニ突入シ皇軍ノ真価ヲ發揮セントス」という、訣別の電報を發し、その後、通信が途絶えた。

「バンザイ攻撃」と日本将兵の敢闘

アメリカ軍は最後の玉砕攻撃を、「バンザイ攻撃」と呼んだ。アメリカ軍の記録によれば、この時の玉砕攻撃では、日本将兵の四千三百十一体の死体が、数えられた。

サイパン島における日本軍の戦死者は、四万一千二百四十四人にのぼった。それに対して、アメリカ軍の戦死者は三千四百四十一人、負傷者が一万一千四百六十五人だった。

およそ二万人の在留邦人のうち、半数が戦没した。

日本海軍は六月十九日から二十日にわたった、マリアナ沖海戦で、航空母艦三隻を喪失

し、さらに他の空母一隻に損傷を蒙り、この後、母艦航空戦を戦う能力を失った。

二十一日にアメリカ軍が航空母艦十二隻、戦艦六隻、巡洋艦九隻、駆逐艦五十七隻によって支援されて、グアム島に上陸した。

『アメリカ太平洋戦争公史』によれば、上陸前に三日間にわたって、海上から合計して一万六千二百十四発を、撃ち込んだ。

グアム島では、一万九千人の守備隊が迎え撃ったが、軍司令官の小畑英良中将が早くもアメリカ軍が上陸した、三日後の七月二十四日に、大本営に対して訣別の電報を打電した。「軍ハ全兵力ヲ以テ敵主力ニ対シ二十五日夜間ヲ期シ一挙ニ決戦ヲ求ム。

余リニモ懸隔けんかく(かけ離れている)セシ敵物量ト雖モ忠勇ナル皇軍精神力ニ対シ絶対信頼ノ念ハ不動ナリ」

このような訓示や、訣別の電報には、「皇軍ノ面白」とか、「男児の真骨頂」「皇軍の真価ヲ發揮」といった、美辞がちりばめられていた。

今日でも、日本国民は「平和」とか、「平和憲法」「護憲」「国連」といった言葉に、酔いやすい。

九月十五日に、四万九千人のアメリカ軍が、ペリリュー島に上陸した。日本守備隊の五

倍の兵力だった。

一万五千人の日本守備隊が、この小さな島にあった。地下壕や、洞窟にこもって、十一月二十五日に玉砕するまで、七十三日間にわたって、奮闘した。

アメリカ軍は三、四日あれば、ペリリュー島を攻略できると、思っていた。

ペリリュー攻略作戦を指揮した、チェスター・ニミッツ・アメリカ太平洋艦隊司令長官は、『ニミッツ回想録』のなかで、「ペリリューでは、アメリカ軍はアメリカの歴史において、どの他の上陸作戦にもみられなかった、四十%という最大の戦死傷率を蒙った」と、述べている。

どの戦場でも、日本軍はよく戦った。

ニミッツ元帥は、日本将兵の敢闘を賞讃する、詩をつくった。

今日、ペリリュー島に、このニミッツ元帥の詩を刻んだ、石碑が建っている。

「諸国から訪れる旅人たちよ この島を守るために、日本人がいかに勇敢な愛国心をもって戦い、そして玉砕したかを伝えられよ。アメリカ太平洋艦隊司令長官 C・W・ニミッツ」

“Tourists from every country who visit this island should be told how courageous

and patriotic were the Japanese soldiers who all died defending this island. Pacific Fleet Command Chief (USA) C.W.Nimitz”

死ぬために戦うとは

アメリカ軍は、日本兵の心理を理解することが、とうてい、できなかった。

アメリカ兵が生きるために戦うのに、日本兵が死ぬために戦うことが、信じられなかった。

日本文学研究の第一人者として、文化勲章を受勲したドナルド・キーン教授は、戦争中に海軍日本語学校で学び、太平洋戦線で日本兵捕虜の尋問や、日本兵の遺体から奪った手紙や、文書の翻訳に当たった。

キーン教授は、著書『日本との出会い』(中央公論新社)のなかで、

「ガダルカナルを餓島と呼んだ日本軍の兵士たちの耐えた困苦は、圧倒的な感動を呼び起した。アメリカ軍の兵士の手紙には何の理想もなく、ただ元の生活に戻りたいとだけ書かれていた」

「大義のために滅私奉公する日本人と、帰郷以外のことにはまったく関心を持たない大部

分のアメリカ人。日本の兵に対しては賛嘆を禁じえなかった。そして結局、日本人こそ勝利に値するのではないかと信じるようになった」と、述べている。

キーン教授は『戦場のエロイカ・シンフォニー——私が体験した日米戦』（藤原書店）のなかで、「不平を言わない日本人（兵）は本当に偉いと思いつながら、アメリカ人たちは『今日の映画は、詰まらなかつた』とか『タバコがまずい』とか、あるいは『早く帰りたい』といった話ばかりです。それらの手紙の中に、この戦争の目的は日本の民主化であるとか、理想や期待を語る言葉は、一度も接しませんでした」と、語っている。日本兵のように、「崇高な思いを抱く」アメリカ兵なぞ、いなかったのだ。

神風特別攻撃隊

ペリリュー島は、フィリピンにもっとも近い島だった。次は、フィリピンの番だった。

十月十七日に、フィリピンのレイテ島東方の海上に四百二十隻の輸送船を伴った、航空母艦、戦艦など三百十四隻のアメリカ艦隊が集結した。三千二百機の陸上機と、千二百機の艦載機が参加した。

この時、フィリピンを受け持っていた海軍第一航空艦隊は、それまでの戦闘で消耗して、実動機といえば、ゼロ戦が三十五機、雷撃機『天山』と雷・爆撃機『銀河』が十二機など、合わせても、百機以下しか残っていなかった。

このころになると、熟練パイロットの大多数が、戦死していた。海軍の操縦士の平均飛行時間が三百時間、陸軍の場合は、二百時間しかなかった。一人前のパイロットになるためには、五百時間が必要だといわれる。

第一航空艦隊司令長官の大西瀧治郎中将が、特攻隊の生みの親と呼ばれている。

大西中将は、一機をもって、一艦に体当たりして、敵艦を撃沈する特別攻撃しか、戦局を挽回することができないと、信じた。

十月二十日に、関行男海軍中尉が「本攻撃隊を、神風特別攻撃隊と呼称す」という編成命令を受けて、ルソン島のマニラから八十里北にあるマバラカット基地から、最初の特攻隊として、八機の僚機を率いて、飛び立った。

今日、フィリピンの地元の人々の手によって、マバラカット基地の跡に、「ここから、ワイルドファーストオブライタルビニーマンゴンプ世界で最初の軍人間爆弾となった、関行男中尉が飛び立った」と刻まれた碑が、建立されている。

関中尉が飛び立ったのは、杉山参謀総長が開戦に当たって、京都の石清水八幡宮で「神風の助けを借りなくて済むように」祈ってから、二年十一月後のことだった。

石清水八幡宮は、京都の南西を守護する神社として、平安時代に建立され、『徒然草』に登場するが、社格が伊勢神宮と並ぶとされてきた。

東條首相が開戦に当たって、「人間一度は清水の舞台から、飛び降りてみるものだ」と語ったことは、よく知られている。

京都の清水寺は、高い舞台が本堂から深い谷に面して、山の斜面にせりだすように、高く設けられている。

終戦の方策のない対米戦争

日露戦争に当たっては、国家指導者が終戦の方策について、熟慮したうえで開戦したが、対米戦争に踏み切った時には、誰一人、どのようにしたら、戦争を終結することができるのか、考えなかった。

日本は考えることができないところまで、追い詰められていた。

二十日に、二十万人以上のアメリカの大軍が、レイテ島への上陸を開始した。

十月二十三日から二十六日に、残存していた全海戦力をあげて日本海軍が出撃した、レイテ沖海戦が戦われた。

日本海軍は、レイテ沖海戦で、航空母艦を四隻、『武蔵』を含む戦艦を三隻、重巡洋艦を六隻、軽巡洋艦を四隻、駆逐艦を十一隻、潜水艦を五隻、いっきよに失った。これは、近代海戦史における、最大の損害だった。

アメリカはレイテ海域にあった、三十二隻の航空母艦のうち、『ガムビア・ベイ』『セント・ロー』『プリンストン』の三隻と、駆逐艦を三隻失ったが、すべて特攻攻撃によるものだった。

しかし、戦局の行方を変えるようなものでは、とうていなかった。

翌年八月に日本が敗れるまで、海軍から二千五百三十一人、陸軍から千四百十七人が、航空特攻隊員として飛び立って、帰ってこなかった。

この数字には、本土上空でB29機に体当たり攻撃を行った搭乗員は、含まれていない。

一万メートル以上の高度を飛ぶB29を攻撃するためには、日本の戦闘機は機関砲などの武装を降ろして、機体を軽くしないと、そこまで昇ることができなかった。五千メートル以上の射程をもった高射砲も、なかったから、体当たりする他に、方法がなかった。

それでも、搭乗員がつぎつぎと志願して、兵装を外した迎撃機に乗って、大空に高く駆け上っていった。一万メートルの高度に達するためには、一時間以上かかった。

日本海軍はレイテ沖海戦を境にして、アメリカ海軍に対して、決戦を挑む能力を失った。

第七章 特攻隊はなぜ讃えられるのか